

## 書評

Yasuhiro Takeuchi,  
*Mark X: Who Killed Huck Finn's Father?*

(New York: Routledge, 2018)

吉 国 浩 哉

本書は、同著者(竹内康浩)が2015年に日本語で出版した、『謎解き「ハックルベリー・フィンの冒険」——ある未解決事件の深層』での議論の内容をもとにしつつ、英語で書き直し、2018年にRoutledge社から出版されたものである。ハック・フィンの父親である、パップの死の「謎」を中心とする主題自体は同じだが、重複する文章はほとんどなく、翻訳ではない。全体的な印象としては、日本語版が、「深層」にあるマーク・トウェインにとっての語りえぬものとも呼ばれうるようなやや抽象的なテーマを扱っていたのに対し、この英語版は、基本的には『ハックルベリー・フィンの冒険 (*The Adventures of Huckleberry Finn*)』(以下『ハック・フィン』)というテキストを分析する作品論になっていると言える(そのためか、英語版ではフロイトに関する思索がかなりの量削除されている)。また、日本語版が一般読者向けの選書として発表されたのに対し、英語版では先行研究に対する言及や参考文献がより充実した学術書として書かれているという違いもある。『ハック・フィン』の「謎」を解明するにあたって、日本語版でもある程度議論されていた『探偵トム (*Tom Sawyer, Detective*)』や『トム・ソーヤーの冒険 (*The Adventures of Tom Sawyer*)』、『うすのろウィルソン (*The Tragedy of Pudd'nhead Wilson*)』が、英語版ではさらに詳細に分析されているため、全体としての分量も大幅に増えている。惜しくも受賞は逃したが、2019年のエドガー賞 (Edgar Allan Poe Award) の評論・評伝部門にも最終候補としてノミネートされた。

本書(ならびに近年のトウェイン研究)によれば、マーク・トウェインはもともと『ハック・フィン』を推理小説として構想していたという。つまり、物語序盤でハックとジムは難破船の中で男性の死体を発見するのだが、それがハックの父、パップ・フィンの死体であり、その殺人とその犯人捜しをめぐる物語となるはずだったのである。それがどういうわけか、この父の死をめぐるプロットは廃棄されることになる。ジムたちが見つけた死体がハックの父であるという事実は隠されたまま、物語は別の方向へと進み、テキスト最終ページになってやっと、あの死体がパップのそれであったという事実だけがジムからハックへと(不承不承に)告げられることになるが、殺人の犯人は不明のまま物語は終わってしまう。

筆者によれば、このようにトウェインが父の死、ないしは父の死体というモチーフを書ききれなかったその原因は、トウェイン自身の人生に関係があるという。すなわち、幼少期のトウェイン自身が、父の死体が解剖される場面を鍵穴から覗き見してしまったという事件である。さらにいえば、トウェイン自身は、父の死に際し思わず喜びを感じてしまったという。(喫煙の禁止など)さまざま規則で息子を束縛していた父の死は、トウェイ

ンにとっては解放と自由を意味していたのである。そして、このような喜びを感じてしまったこと自体は、トウェインの中に重大な罪悪感を残すことになる。この喜びは、自分が自由を得るために父の死を望む欲望、さらにそこから転じて父を殺したいというオイディプス王のような（無意識の）欲望として、自らの中に発見されてしまったからだ。このようなトラウマ的体験およびそれに起因する罪悪感や良心の呵責から、父の死というテーマに接近しそうになるたびに、トウェインは書くことができなくなったという。『ハック・フィン』を完成させるまで、トウェインは二度、執筆を中断してしまうが、本書の指摘によれば、そこにはいずれも父の死のテーマが関わっているし、ハックの父、パップの死体が物語から忘れ去られてしまったこと自体も、このような作者トウェインのトラウマが関わっているということになる。

このような推理が伝記的にはたして正しいのかどうか、トウェイン研究の専門家ではない評者に判断する資格はないが、興味深いのは、これら父の死または父殺しのテーマと罪悪感や良心の呵責のそれが、『ハックルベリー・フィンの冒険』というテキストに反映されているのみならず、ハックルベリー・フィンというキャラクターにも関わっているという指摘である。つまり、何らかの意味で、ハックも父殺しの欲望を抱いており、また同時に、何らかの意味で、罪悪感を抱いているのである。

自由で無垢な存在の典型としてみなされることの多いハックルベリー・フィンというキャラクターの中で、（無意識の）父殺しの欲望が蠢いているという指摘は突飛に聞こえるかもしれないし、その根拠を作者の生涯に求めることについても、研究アプローチによっては異論が出るかもしれない。しかし、以下の二点は本書の指摘から明らかである。すなわち、ハックが何らかの罪悪感を抱いていること、ならびにトウェイン作品においては、父殺しのテーマが直接、間接に類出するということである。これらの現象を引き起こした実際の原因がトウェイン自身による父の解剖の目撃であるかどうかは分からない。しかし『ハック・フィン』の中でも、何らかの意味での罪悪感や良心の呵責と、そこに結び付けられうる罪としての父殺しという二つの要素が機能しているのは間違いないだろう。

たんなる父の死ではなく、もっと積極的な父殺しのイメージ、とくにオイディプス王の神話に近い形でそれが現れてくるのは、いわゆる「筏の章」と呼ばれるエピソードである。ここでは、筏乗りたちが焚き火を囲んで物語を語っているのをハックが物陰から盗み聞きしているのだが、それはあからさまに子殺しと父殺しの物語である。エドというその語り手によれば、かつて、勤めていた筏のあとをつけるようにひとつの「樽」が流れてくることがあったという。それと同時にその筏に怪我や落雷などの事故が頻発した。不審に思った筏乗りたちがその樽を引き上げて中を開けてみると、そこには赤ん坊の死体が入っていた。それは同じ筏にいたディック・オールブライトという筏乗りが三年前に殺した息子、チャールズ・ウィリアム・オールブライトの死体であった。殺された子どもの死体が父を三年間追いつけたのである。この子殺しの事実を知った他の筏乗りたちはディックをリンチにかけて樽の呪いを解こうとするが、ディックは赤ん坊の死体を抱えたまま川に飛び込み、二度と浮いてくることはなかったという。

本書によれば、この「筏の章」ではハックによる「潜在的な父殺し」が描かれているという。すなわち、物陰で盗み聞きしていたハックが筏乗りたちに見つかったとき、自らの名として彼が口にしたのは「チャールズ・ウィリアム・オールブライト」という、死体になっ

でも父を死へと追い詰めた子の名前だったのである。この場面では赤ん坊のように「素っ裸」のハックと「父を殺す赤ん坊との平行関係」が成立している。<sup>1)</sup> この場合、もちろん直接的に「父」として殺されるのは、ディック・オールブライトだが、パップの死を望むハックの欲望も物語全体としては否定できない。まずなによりも、ディックやあるいはオイディプスの父ライオスのようにパップ自身が子殺しを行い兼ねない人物として描かれているからである。

そのうちにおやじは毛ふからころげ出て、すごい面そうでパッと立ちあがり、おれを見て、おそいかかってきた。折りたたみナイフを手に、小屋じゅうおれを追っかけまわしながら、おれのことを死の天しと呼んで、おまえをころしてやる、そうすりゃもうおれをむかえにこれねえさと言った。<sup>2)</sup>

パップが生きている限り、ハックは生命の危険にさらされるのである。そのような父の死を、何らかの形で願うこと自体は不自然と言えないだろう。また、第十章でハックが蛇を殺すのも父殺しを暗示している。パップは何度か蛇にたとえられているだけではなく、その死体を発見したジムが、「えんぎのわるい」ことを理由にしてハックにその話題に触れないようにする際に言及するのが、「ヘビの皮」だからである。つまり、ヘビの皮に触ってはならないのと同様に、パップの死体についても触れてはならない。しかし、そう告げられた直後にハックはヘビを殺すのである。(Takeuchi, 171)

しかし、父殺しのモチーフ以上に重要な本書の指摘は、テキスト全体に浮遊しているかのようなえもいわれぬ「罪悪感」である。たとえば、グランジャフォード家とシェファードスン家との「しゅくえん」の結果、両家に多くの死者が出てしまったことに対し、ハックは次のように述べる。

なんとなく、なにもかもおれのせいだってゆう気がしたのだ。あの紙きれは、ミス・ソフィアとハーニーがどこかで二時半に待ちあわせてかけおちするとゆうイミだったんだろう。あの紙のことも、ミス・ソフィアのみょうなふるまいのことも、父おやに知らせるべきだったとおもった。そうすればミス・ソフィアは父おやにとじこめられて、こんなひどいこと起きずにすんだかもしれない。(209頁、第18章)

ここでも父の死が関わっている。つまり、ハックにとって「父親的存在」であったグランジャフォード大佐も、この「しゅくえん」の戦いの中で命を落としていたのであった。このように、ハックが罪悪感を感じる際には、同時に父の死や父殺しのモチーフが現れてくる。父殺しの罪に対する罰として、罪悪感がハックを苦しめるのである。(Takeuchi, 190) しかし厳密に言えば、大佐やグランジャフォード家の人々の死について、直接的にはハックに非があるわけではない。にもかかわらず、ここでハックは自分自身を責めている。本

<sup>1)</sup> Takeuchi, *Mark X*, p. 164. 以下括弧内に頁数を示す。

<sup>2)</sup> マーク・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒けん』柴田元幸訳、研究社、2017年、58頁。以下括弧内に頁数を示す。

来責められるべきは当事者である両家のはずだが、ハックは犯していない罪に対して良心の呵責を感じている。犯してもいない罪に対して、(精神的な)罰を受けているのである。

少年の無垢と自由の物語としてイメージされがちな『ハック・フィン』に、実はこのような罪悪感・罪の意識があるというのは、評者の見るところ本書のもっとも重要な指摘である。『ハック・フィン』にはなにか不気味なものが潜んでおり、本書はそれが何なのかを探求しているのである。ゆえに、ハックが何らかの罪悪感を抱いているとすれば、そこには何らかの意味で罪があるということにもなる。それはもしかしたら父に死んで欲しいと思うことの罪かもしれない。実際、ハックから見ればその父パップは死に値するような父、殺さなければ自分が殺されてしまうような父であった。ここでは罪悪感と父殺しが原因と結果の関係として理解されることになる。原因としての父殺し(の欲望)がまずあり、その結果としての罪悪感が生じたのである。

しかし、別の関係づけもまた可能であろう。たとえば、まず罪悪感が先行し、父殺しのイメージは、何らかの意味で、それに対する応答と考えることである。『夢判断』でフロイトは、「病氣中の父を看病して、ついに父が死んでしまつて大いに悲嘆に暮れたある男」の夢を報告している。その男によれば、夢の中で「父は生前のように元気でいて、平常と変わらず彼と話をした。しかし[中略]父は実は死んでいるのであつて、ただそれに気づいていないだけなのだ」。これをフロイトは次のように解釈する。つまり、息子「本人の願望の結果」として、父は死んでいるのであるが、夢を見ている本人は自分が「そういう願望を持っていること」に気づいていないだけなのである。この夢の当事者は看病しているあいだに、父の死を求める願望、「死がこの父の苦しみに早く結末」をつけて欲しいという、「元来はいたわりの感情」を抱いたのだが、それが死後の悲嘆の中で、自分がそういう感情を持ったがために「父親はいのちを縮めたのではあるまいか」という自分自身に対する「無意識の非難」に変わってしまったのだという。フロイトによれば、「初期幼児時代の、父に対する反抗的感情の喚起によって」、この自己に対する無意識の非難を「夢として表現することが可能」になったのである(「無意識」なので、本人は意識的にはこの非難に「気づいていない」のではあるが)。<sup>3)</sup> これは『ハック・フィン』にもあてはまる。すなわち、ハックの願望の結果、父パップは死んでいるのであるが、ハック本人は「それに気づいていない」。しかし無意識は、父を死に至らしめたハックを責めている。それが原因のはっきりとしない罪悪感として現れるのである。そして、ここでフロイトの解釈が示唆的になるのは、もともとは愛情表現であった父の死への願望が、父の死後、悲嘆の中で罪悪感の材料として利用するために罪に変換されている点である。罪は後から遡及的に見いだされているのであり、必ずしも原因としての罪が初めにあったことを想定する必要はない。フロイトの例に見られるように、罪はなくとも罪悪感が生じうるのである。

だとすれば、罰としての罪悪感に対して、それを惹き起こした原因としての罪がない場合も考えられないだろうか。たとえば、オイディプスが目を失い、テーベから追放されたのは、母と交わり父を殺すという罪を犯したためだが、そのこと自体は彼が生まれる前か

<sup>3)</sup> フロイト『夢判断(下)』高橋義孝訳、新潮文庫、1969年、154-55頁。日本語版『謎解き「ハックルベリー・フィンの冒険」』でも、フロイト「トーテムとタブー」における、同様の「呵責の念」が参照されている(新潮選書、117-18頁)。

ら運命によって決定されていた。そのような運命によって翻弄された結果について、果たしてそれをオイディプスの罪と呼ぶことができるのだろうか。むしろ、彼は罪を犯す前から、というよりも生まれる前から、すでに運命から有罪宣告を受けてしまっていたのではないだろうか。あるいは、別の古典的物語を参照するならば、『変身物語』などで報告されているように、ニオベーはレートーに対して自らの多産を自慢したことによって、自分の子を皆殺しにされてしまった。しかし、そのような傲慢さ自体は本当に罪なのだろうか。ベンヤミンが「暴力批判論」で指摘しているように、ニオベーはいかなる現行の法も犯してはいない。つまり、ニオベーは法を犯していないにもかかわらず、罰を受けたのである。彼女が全ての子どもを失ってしまったのは、いかなる法をも措定することができる、神々の力に対して挑戦してしまったからである。有罪判決とその罰が下されてはじめて、傲慢が遡及的に罪と規定されたのだ（正確に言えば、これは違犯のための罰ですらなく、違犯という概念一般に先立って法をうち立てる力＝暴力そのものである。ベンヤミンはそれを「法措定的暴力」という）。<sup>4)</sup>

すなわち、ハックは（たんに欲望を抱くことを含め）いかなる罪も犯してはいないにもかかわらず、罪悪感を感じているのかもしれないのである。だとすると、父殺しのモチーフとは、この罪悪感が現れるに際し、その原因として遡及的に想定されたものということになる。そのような因果関係の想定は、ハックの無意識の中で起こっているのかもしれないし、あるいは作者トウェインの幻想の中で起こっているのかもしれない。しかし、無意識であれ、幻想であれ、このような因果関係の体をなす結びつきがこのテキストで起きているのは確かである。ゆえに、父殺しの欲望を妄想と批判するのは全くの的外れである。それは、家族や友人を亡くして罪悪感に苛む（フロイトが『夢判断』で言及したような）人物に対して、その罪悪感には客観的根拠がないと告げるのと同じである。問題なのは、どうしてそのような根拠のない、罪のない罪悪感が発生するのかということである。犯してもいない罪に対して、罰としての罪の感情を感じさせる何らかの力のようなものが作動しているのではないだろうか。詐欺師の「王」と「公しゃく」が群衆によって「タールと鳥のハネ」のリンチを受けているのを目撃して、ハックは次のようにつぶやく。

見ていてゾットするながめだった。人げんっていうのは、人げんどうしずいぶんざんこくになれるものだ。もう手おくれだってことはあきらかだった。おれたちにはなにもしてやれない。[中略] それでおれとトムはとほとぼ家にかえった。おれはもうさっきみたいにいせいのいい気ぶんじゃなかった。おれはダメなやつだ、そうおもってしゅんとして、なぜかなにもかもおれのせいみたいな気がした。べつにおれはなにもやっていないんだけど、いつだってこうなのだ——いいことしようがわるいことしようがカンケイない、人げんの良心ってやつにはふんべつもなにもありやしない。どっちみち人をせめるようにできてるのだ。(418-19頁、第33章)

これはほとんど形而上学的とも言える罪悪感である。この世界の不正と暴力について、ハッ

<sup>4)</sup> ヴァルター・ベンヤミン「暴力批判論」浅井健二郎訳、『ドイツ悲劇の根源(下)』所収、ちくま学芸文庫、1999年、264頁。

ク自身は何も手を貸していないし、止めるすべもなかったのにもかかわらず、罪悪感を感じている。ニオバーの子どもを皆殺しにした神々の力と同様に、この「良心ってやつ」は結局何をやっても、やらなくても、有無をいわず人間に判決を下し罰する。しかもその有罪判決は事前に確定しているのである。これが『ハック・フィン』の世界である。そして本書は、このような世界を統べる力とその働きを、罪と罰との関係、父殺しと罪悪感のテーマに焦点を当てながら丹念にたどっている。

ベンヤミンによればそれこそが悲劇が繰り返される世界である。運命という名のもとで法措定的暴力が支配する世界では、全ての人間は潜在的には有罪であって、無罪の者とはいまだ有罪判決を受けていない者、あるいはたんに罰を受けていない者という意味でしかない。悲劇においては、無垢や無実は不可能であり、不幸としての有罪性の反対概念が幸福だとすれば、それも罪と見なされてしまう。「ギリシア古典時代における運命思想の形成にあっては、ある人間に与えられる幸福は、その人間の行状が無垢なものであることの証として理解されるのではまったくなくて、この上なく重い罪過である傲慢 (Hybris) への誘惑と捉えられている」。逆に言えば、もしもそれが可能であるとすれば、「幸福」とは有罪か無罪という判定とは関係がなく、人間を悲劇的な「運命の領域からその外へと連れ出す」ことができる。<sup>5)</sup> 本書の議論を手引きとすると、『ハック・フィン』のなかから見えてくるのは、この(父と子が殺し合う)悲劇的な運命の世界であり、そしてそこから斜交いに垣間見えるのはベンヤミンのいう意味での「幸福」の困難である。ハックとジムの幸福と読める場面がこの物語には何か所か登場するが、それらは罪悪感という「副作用」を伴わずにはいられないのである。<sup>6)</sup> それは「幸福」であること自体が、罪であり罰を惹き起こす原因となっているかのようである。

この書評を締めくくりにあたり最後に指摘しておかなければならないのは、本書の筆者がみせる異常なまでの細部への集中である。それは、一連のサリンジャー (J. D. Salinger) 論でもいかに発揮されていたが、<sup>7)</sup> その天才的なまでの精読は本書においても健在である。ハックによるヘビ殺しの件などは精読というものの楽しみを存分に堪能できる箇所である。それは、探偵小説としての『ハック・フィン』という本書の議論の出発点とも響き合うように、筆者自身が探偵のように物語世界を精査しているようである。アメリカミステリー界最大の賞である、エドガー賞にノミネートされたのもその意味で当然であろう。昨今の文学研究では、テキストを読まなくても、ともすればあらすじと物語設定によって議論することが可能になってしまった感があるが、そのためにかえて、この *Mark X* のようにテキストを詳細に、愚鈍に読むことこそが、文学に対する新たなアプローチの仕方を産み出すように思えてくる。<sup>8)</sup>

<sup>5)</sup> ヴァルター・ベンヤミン「性格と運命」浅井健二郎訳、『ドイツ悲劇の根源(下)』所収、ちくま学芸文庫、1999年、210-11頁。

<sup>6)</sup> 竹内『謎解き「ハックルベリー・フィンの冒険」』、12-13頁。

<sup>7)</sup> 竹内康浩『「ライ麦畑でつかまえて」についてもう何も言いたくない』、荒地出版、1998年など。

<sup>8)</sup> たとえば、かつてニューヒストリシズムの旗手と目されたD・A・ミラーは近年“too-close reading”を提唱している (D. A. Miller, *Hidden Hitchcock*, Chicago: University of Chicago Press, 2016)。